

## 史料 解説と翻刻

### 『松前箱館二而 異国人一条之事』

日記

奥南部黒沢尻川岸 朝吉

嘉永七甲寅年 四月十三日

藤 原 暹

#### 解説

1、伊勢屋朝吉―仲買人としての国際人

「黒澤尻川岸 朝吉」とは伊勢屋朝吉の事である。彼の事跡については司藤真雄氏の「伊勢屋朝吉―維新时期・南部藩御用商人の一人」が知られる。

まず司藤氏の記述を基にして朝吉の紹介を行ってみる。司藤氏は次のように書き出している。

伊勢屋朝吉は、城沢朝吉の商舗屋号と、本名とを合わせた代名である。彼は文政八年（一八二五）十月十二日、和賀郡黒沢尻村里分の下川岸城沢常蔵の二男として生まれた。十七歳のとき兄総吉が病死、父も病弱であったので（四年後母歿、九年後父歿）十八歳で（天保十三年（一八四二）南部藩御用船北上川御船三百五十俵積船の船頭を拝命し、黒沢尻港と石巻港との間の船運を司っている。嘉永五年（一八五二）から、石巻の伊勢屋惣左衛門の代理となり、函館大町の大津屋茂吉の宅へ止宿し商売をするようになった。

水沢で鰯網百三十八尺から百五十尺までを壱両で買入れ、函館へもつていつて七十八尺から九十尺を壱両で売り大儲けをしている。安政五年（一八五八）には函館南京屋小三郎の宅や土蔵までを一ヶ年二百両で借り支店を出し、呉服、木綿、小間物を商った。このときから「伊勢屋」の称を出した。さらに函館山ノ上町と神明町へ質屋をだし、五百石積の観音丸を買入れ、栄吉を船頭に雇った。

翌安政六年（一八五九）、南部藩が函館御警固となったので、朝吉は御陣屋御留主居所海防所御用達兼御国産世話方を仰付かった。ついで八戸藩も函館へ出張することになったので、八戸藩からも御用達を仰付かった。函館へ盛岡や八戸の領民が働きのために渡航してくれば、必ず御番所沖の口で「人改め」をするのであるが、その改立合人が伊勢屋朝吉の役であった。沖の口改めは、壱人につき二百文の手数料をとることであった。

このころ多国人と取引することを幕府で許していた人は、函館では伊勢屋朝吉と、松井喜兵衛、ユサシ宿伊兵衛、高田屋要吉の四人社中だけであった。貿易商人四人のうちの一人という地位にいた。本史料「松前箱館二而異国人一条之事 日記」は司藤氏の触れていないものであると共に、後に外国人相手の御用商人として活躍する起点となるペリーの箱館入港、箱館の国際化を目のあたりにした朝吉の日記である。

朝吉の商売は時宜を得た売り物にいち早く着手する事にあった。その為には船舶への関心も早くからあった。文久四（元治元）年頃には洋式帆船箱館丸を利用し魚貝・海藻等の輸送売買を行っている。やがて彼は外国人相手に絹糸や南部銅の取引へと進んでいくが、それと共に新しい船舶建造への関心も高まった。こうした彼の活動の背後には南部鉾山学の中心物大島高任が在った。

慶応四年（一八六八）五月一日、南部銅（和賀郡水沢銅山のもの）千

箱を積入れ、大島高任らと大阪を目ざして出航したときは、南部藩会計御用係として乗込んだ。藩蒸気船飛隼丸の器械方（機関士）は外国人であつたし、釜火焚（火夫）は南京人であつた。

横浜港へ着き、大阪までの用意のために石炭、石油、諸品など買入れていたところ、銅を積込んだままの蒸気船を、官軍役人がきて有無をいわさず借上げてしまった。このとき朝吉は大胆な行動をしている。（これが『大島高任行実』に欠けている部分である。<sup>3</sup>）

なお、幕末期における南部盛岡藩洋式船の研究として本田敏雄論文がある。

大島高任と朝吉の関係は明治に入つてなお深まる。特に大島が明治三年民部省鉾山司を命ぜられ、やがて工部省鉾山局に重きを置くようになると、朝吉の活動も活発となる。

明治三年三月は御用で宮古、盛岡間を往復。七月八日は鹿角御銅山へ御用。十二日には大島高任に面会、十九日に立出。二十日は盛岡黒石野に居る帷子繁治御用。十二月二十六日は江刺県庁より御用で遠野へ立出（県庁所在地は遠野であつた）。それは南部様へ金千四百五十両余を貸していたの返済金受取りのためであつた。すなわち朝吉が旧南部藩主へ貸金していたものを大蔵省が支払つたのである。明治五年（一八七二）三月十四日、南部中将様上京のときは、和賀川、胆沢川の御渡船御用掛りとなり、六月二十五日には宮古へ御用、それは千歳屋清治郎が重茂村の漁業権十ヶ年願立について、戸長の末印をとるためであつた。この漁業権の税金は県税一ヶ年金四百五十両、南部家へも年金四百五十両、重茂村へは一ヶ年金三十両の手当を出すという条件であつた。朝吉はこの時宮古町の東屋長七、尾張屋半兵衛と共に、千歳屋の漁業権の株主の一人となっている。

明治七年（一八七四）七月十五日には、工部省鉾山局御用達となる。南部釜石港へ鉄山開業、独異人ピンヒール氏、大島高任氏着任。

招きによつて人夫三十名を雇つて出張。<sup>5</sup>

この後、朝吉は釜石の大小類焼と宮古沖の漁業の大損を機として黒沢尻に帰るが、十余年間の消息は不明である。

しかし、老いてなお彼の意欲は衰えなかつた。

明治二十一年（一八八八）、東京府下南葛飾郡太郎兵衛新田砂村に魚粕製造場を設けた。屋賃一ヶ月金貳円五拾銭で借り、船頭たちを支配人とし、日本橋魚川岸から魚類を四斗樽壹ヶ金三拾五銭から四拾銭で仕入、焼魚にして一樽六拾銭にて販売、この商売は損益なし、サメのワタからサメ油をとり、鮪のワタからも油をとり、汁を肥料として売つて、これで益を出している。二十三年（一八九〇）十二月十八日帰村を決意。

また、

西和賀郡湯田村の真名板で銅鉾筋を発見し、借宅して経営をはじめた。開坑の年月日は伝わらないが、帰郷の二十四年であつたことはいふがえる。大島高任の示唆であつたことは言う迄もない。

朝吉は二十八年（一八九五）旧十二月に怪我をし、帰宅療養、そのまま鉾山を捨てたが家賃だけは毎年六拾円づつ渡している。

明治三十四年（一九〇一）三月三十日、大島高任が没したのであるが、その二ヶ月前の一月二十九日に、高任の命であつたらうか、嗣子の工学博士大島道太郎が「城沢家へ記念のために」といって高任夫妻の写真を朝吉へ贈つてきている。これからみて、慶応四年（一八六八）以来、大島高任の陰の人として活動していた様子がうかがえる。

明治四十年（一九〇七）四月六日、川岸の自宅で往生、染黒寺の代々墓へ葬られた。八十三歳であつた。

## 2、朝吉日記「異国人一条之事」

この日記はペリーが神奈川県条約締結(嘉永七年三月三日)の後、条約中、開港の約束された下田、箱館の視察を希望したのに対して幕府がこれを許し、いよいよ箱館に入港してくる直前から書き出されている。

記述全体は異国船入港を待受ける箱館の警備の様子、入港状況、入港後の異国人の行動風俗、言語等を絵入りで朝吉が述べたものである。全二十七枚ある。

この日記中、異国人との接触、言語(英語)の聞き取り記録に関してはすでに拙稿「南部藩英学の濫觴」<sup>7)</sup>において指摘した。その際、日本国内の類書小島又次郎『亜黒利加一条』<sup>8)</sup>平尾魯僊『洋夷茗話』<sup>9)</sup>丸屋吉右衛門『北辺新聞』<sup>10)</sup>等々の比較も行っているので重複をさけ、ここでは国外(箱館来航外国人)の記録との比較を中心にしてその内容の紹介を試みたい。

日本来航に関してはペリー提督の『日本遠征記』が名高いが、本稿ではペリー提督に随行したサミュエル・ウエルズ・ウィリアムズの『日本遠征艦隊の日記』<sup>11)</sup>との比較を試みる。

「第十章 箱館港の調査」(30-33頁)という部分である。

朝吉日記は嘉永七年正月より松前箱館に於てとあるが、この間四月のアメリカ船入津まで箱館在住民へは長文の触書が出て注意をうながしている。<sup>12)</sup>触書について小島又次郎『亜黒利加一条写』には記述があるが、これにはない。ただ「えらき御上様より御触出しニ……」という文がみられ、当然の事朝吉はそれを前提にしている事が分る。又直接指示を受けたのは「箱館役人」「町方頭取」大島幸平なる人であった。

四月廿一日蒸気船式艘入津の時「そのはせり之早き事飛鳥の如し」と感想を述べているが、これは朝吉自身が「見測(物)」した事である。(なお、「はせり」も「けんぶち」等々は南部弁である)

異人の一行に「カントウ人者人」が付き添って居り、彼との筆談の

模様や扇子に書を認めてもらった事が記されているが、「カントウ人」こそ羅森であった。羅森の『続日本日記』<sup>13)</sup>に箱館の記事がある。

朝吉の記録はかなり正しい。

廿五日蒸気船衆「ばくづを打」記事、廿六日上町浦屋に居た女達が異人に乱暴される事、それに対して抗議が日本側から出され、アメリカ船でも禁足処分をした事等である。

この部分をウィリアムズの記事とつき合せてみる。

五月二十二日(嘉永七年四月二十六日)、月曜日

提督と艦長二人が松前勘解由の来訪に対する答礼に出かけたが(勘解由は藩主から、当地に赴いてアメリカ人を接見し、丁重にもてなすべき権限を委任するという信任状を与えられていた。彼はこの信任状を提示し、これが漢文に訳された後、自分はすべてのことを決定する全権を委ねられてる。と言質を与えるように断言した。ところが、遊歩制限区域の問題は彼の権限が及ばぬ一件であったのだ。この問題に関しては、あきあきするほど協議が続いた。しかも、昨日アメリカ人が陸で非道な所業に及んだとする、長文の苦情書を突き付けられた。――異教徒たる藩主は、彼の領下の町において、キリスト教徒がこともあろうに安息日に、寺では賭博を開き、屋敷や庭には壁を乗り越えて立ち入り、商店からは品物を持ち出し、狂人のごとき振舞をしたと訴えたのである。正常な良心から社会的拘束が取り除かれたときには、かなり道徳的な人間でも、そんな風に振舞うのだ。

五月二十三日(嘉永七年四月二十七日)、火曜日

日本側から苦情を受けたために、今日は士官全員が禁足となり、士官たちの要求に従って問題を矯正しようと努めた。下級士官の間からは、陸にいくらかの借金をつくっている者の名があがった。ま

た、買い込んできた日本刀は特に苦情的になっているというので、全部手離させることになった。松前候とその名代、それに三人の地方役人に対するたくさんの賜物が陸揚げされた。苦情書に対するこちらの返答も、口頭で今朝伝達された。

朝吉の觀察の中から更に二カ所をとり上げウィリアムズのそれと比較してみる。

一つは廿九日に異国船中で一人病死者が出て廿日に上陸葬儀の行なわれた記事である。これは朝吉がキリスト教による葬儀を仏式のそれにおきかえて見た興味ある部分である。

五月二十五日（嘉永七年四月二十九日）木曜日

昨夜バリダリア号で亡くなった男（James W. Whit）の埋葬地を打ち合わせに遠藤を訪ねた。彼は快く応じてくれた。そしてすぐ近くの寺へ出かけた。しかし、その寺の墓地にはふさわしい空地が見出せなかった。寺は「高竜寺」Korō Zhiまたは、高い竜の寺 High Dragon Temple とつて、戸口には昇天する二匹の竜が彫つてあった。高竜と呼ばれるゆえんであろう。ここが駄目だったので、海ぎわの門を抜けて町を出た。そこから半マイルほど歩くと、古い墓地（山背）があつた。アメリカ人用地はこの小区画に決まった。そこは港を一望のもとにおさめる場所にあつて、一つ一つ墓石を建てたとしても、優に二十五人分の広さはありそうだ。

五月二十六日（嘉永七年四月三十日）金曜日

水兵の亡骸は今朝埋葬された。小さなものではあつたが、やっと碑銘を刻む石を見つけることができた。ところが、この墓地の墓石は佐渡島 Sado Island や日本本土の各所から取り寄せたものとかで、四角な、立派な石ばかりであつた。遺体は船着場に陸揚げされ、水兵に担われて通りを抜け、かねての場所へと運ばれた。沿道には多数の人が列をなし、遠藤も加わつた異例の葬列を大変静か

に見送つた。この埋葬に臨んで日本の役人たちはきわめて礼儀正しく振舞つた。それにもまして、態度が親切であつた。下田の無分別な猪三郎（浦賀奉行組与力合原猪三郎）とは違つて、遠藤は検死の場合まで法律を引合いに出すようなことはしなかつたのである。

異教に対して特別な嫌悪感にはここにはみられなかった。

いま一つは宝行寺での写真撮影の記事である。ペリー提督の応接所には御用商人山田寿兵衛宅が、士官達の利用のためには沖之口役所が、そしてハイネ（画家）、ブラウン（写真師）たち美術家のためには実行寺が当てられていた。

ウィリアムズは実行寺について

ブラウンが銀板写真を撮るのに使う「実行寺」Zhetungio Zhi（美濃近の場所）は、手入れは行き届いているが、古い寺で見劣りがした。近くの墓地は一風変つた趣がある所で、グロテスクな碑や優美な碑やらで埋まつており、石碑の大部分は見事に彫刻されている。一面に祈禱文が書かれていて、長いポール（平塔）が碑のそばに立っていたり、横倒しになつていたりして、墓地に奇異な眺めを与えていた。

と述べ、銀板写真について次のように記している。

五月二十四日（嘉永七年四月二十八日）、水曜日

朝方、遠藤と石塚官蔵の二人に彼らの肖像写真が手渡された。彼らは、背後に槍や笠を持つ家来を従えて、独特な陣羽織 Catobatus を羽織つた自分の姿を、銀板上に入見つて、ひどく喜んだ。ここでは写真の技術については誰もまだ聞いていなかった。好奇心と驚嘆と喜びが彼らの態度や質問に等しく表われていた。今日は何んというよい日だろう、みんなに喜んでもらうことができたのだ……。

ところで、上陸した異人達は好んで品物を物色した。

提督が買物にみえるので、特設市場を盛り上げるために今日の大半をつぶしてしまった。しかし、商品は町ではだいぶ、品不足になっていたので、思うように各種取り揃えるわけにいかなかったのが実情だ。

五月二十七日(嘉永七年五月一日)、土曜日

今朝、特設市場に顔を出していた仲買人に、彼が持っている品物はここへ持ち込めば、いつでも売つてよいし、好きなように商売をしてよろしい、と話しておいた。もはや誰もが購買の機会をもったことであるし、私もそろそろこの仕事から足を洗いたかったのだ。小売商人の態度から察するに、この仲買人は彼らを脅かそうとし、もしくは売りひかえさせようとして、なんらかの手段をとったように思われる。今日は、なんとしてもよい品が数多くは手にはいらないうし、それに、購買熱が大変高いことを考えれば当然の結果ではあるが、価格は全般的にひどく騰貴しているのだ。

朝吉日記には、彼自身が直接に物を売買した記事はない。しかし商人朝吉がこの機会を無に過ごしたとは考えられない。この時期は役人の意志下に品物調達の役に終始していたのではないかと思われる。

朝吉の「異国人一条之事」に続く日記は『函館日記』である。

そこでの記録は異国船の入津、取引きの有様、安政三年大地震の事等が中心で、外国語に関する記録はほとんどない。しかし、入津した異国船との取引きは順調に伸びていった模様である。安政四年七月には「異国船二少し茂無違、同様二見得へ候。アメリカ国ライス恐かんしん仕候」という箱館丸が完成し、箱館・江戸の航行も活気づいた。朝吉の取引きのいくつかを抜き出しておく。

一、(安政四年)異国銭大ワシタラ銀七匁五分目方有。有直段者元松前様の御領地之節、四貫八百文宛ニ而諸品売払申候。小ワシタラ銀三匁七分五厘、其次ハ壹匁八分七厘五毛。右同断割合ヲ以通用いた

し候。

一、アメリカヘ丑(牛)四疋売払申候。右丑(牛)者糧米ニいたし申候。

一、(安政五年)ライシのフレタヘ馬式疋売払代六拾両、式疋ニテ乗馬也。

一、同月(九月)晦日ニ同国式艘入津ニ相成り右之内壹艘者城キ船、壹艘者三本柱也。右船ニ夫婦并ニ家内引越之人参り上陸仕候。然ルニ女八人程、外ニ子供式人実行寺へ住居且右寺ニテハ間ニ合不申候故、高然寺江家分写し、尤式軒分之家内之様ニ見得申候。依え諸道具ハ拾四五人ニテ壹日船よりくばり申候。其市中買物ニ毎日出候処誠ニ日本之言相わかり申候。

右の文中のライシは安政四年四月鯨漁船に乗って到着した米國貿易事務官 Eliza E. Rice で後に初代領事となる。フレタとは Friend であろう。ライスは武田斐三郎の英語の質問に応じ、名村五八郎の英語に磨きをかけるパートナーとなった人物であった。

朝吉はこれらの人達(更に大島高任をも加えた)の側に居り、いよいよ外国貿易へと向かつていくのであった。

## 翻刻

嘉永七甲寅年正月より於松前箱館

異国船着岸の様子ニ而運用備仕候右ニ付大筒拵各町内中よりしんちゅうの諸道具有之候者ハ少し成共召上候様ニ被仰渡候処町内より少し宛差上右加へ大筒六挺拵へ東風留りと云場所に御台場を建<sup>式所</sup>に備置申候外町小路江門を建海岸ハ皆東風留りより内間の外方迄板塀を建海陸之場所ハ仲の口印式ケ所開き且亦嶋山峠へ家を建右家からハ海岸異国船の見届場所也相知之儀ハ

当冲合ニ見へ候節ハ峠へ旗本建近辺ニ候へハ旗式本入船之初ハ三本

## 外ニ半鐘打事ニ相図仕候所

尤高山ニ候故諸方見へ申候右如此用意仕依而之早や三月十五日朝着岸之様子ニ而 走動仕内ニ同日四ツ時

より八ツ半頃迄三艘着岸仕其節の走動之儀ハ山の上ニ而旗を三本建半鐘ならし町小路并ニ寺方諸方ニ而半鐘ならし居見世ハ皆大蔵江大概之品物入置家をメ諸道具迄皆如此ニ仕依而其船三艘ハ東風留りと申処ニ而間懸り仕候扱其節の走動之儀ハ一ツ云様も無之候尤町小路門を固メ家見世ハ皆固メ志め市町一切無用之者出入相留り申候尤も女子共宛ハ元より異国船帰航之叩金棒引候て相出不申様々之兼而御上様より御沙汰有し候間老人も相出不申皆大蔵江隠居り然候に箱館役人大嶋幸平と申者船着岸之叩異国船江対面罷越当御役人の帰り候後より少しく走動も無之様に候得共大筒壹艘に式組四五挺宛有之由ニ而晩からも目合せ一流不仕尤大筒相加候て皆無駄之事ニ相見へ依而私共も心配仕右ニ付私共糧物も名し用意仕打候故内々持参仕于時少し有其候処右異様備仕置申候何辺も如此ニ内心ハ仕打申候十六日橋船式艘下ケ当湊深淺を相斗らへ八方を掻廻り当潤之仲口役所下タ迄相斗へ台船式艘元船江罷帰り別段手馬船式艘下り仲口役所江式艘にて人数十六七人位上陸致し尤三艘の船頭様如もの三人外水主十四人上陸仕其節ハ役所前にて諸役人稽固罷有依而言語ハ一切不相訳り申但水ニ海斗訳り申候装束ハ黒羅紗の志つはうニ同股引の様成者着し右三人ハ金拵の釦壹ツ種ケ嶋老挺ニ鉄砲壹挺宛持参仕右鉄砲の先に釦式尺斗り有之者ニ御座候願ひの通りニ而仲口役所江置し土足ニ而座敷へ罷通り且様々の者馳走仕候後御菓子杯ハ頭也頭巾之様なる者を加ふり右へ皆入込申候而罷帰り候

十七日御城下御目附様御着被遊候処異国船見届ニ東風留り罷越候而宿元江御帰り被遊候

十八日異国船当潤入海式番入仕内間町より十丁斗りも相隔まに順じ

## 後船も式三丁宛相別れ遠く居候

十九日異国船江薪水遣しに付地船三百石以上之手馬斗り御用ニ而水薪を遣し申候処右水薪積手馬船参り候らへハ異国船ニて鐘太鼓鉦の様成者をならし尤帰帆之砌大嶋様参り候節も如此ニならし何連も日本人参り候らへバならし申候右水入桶ハ四斗以上之樽ニ御座候其樽ハ中ニ口有たがわ金たがに候廿日猶又今日も水はこび手馬船三艘宛仰付候而水遣し

廿一日辰の刻に蒸氣船式艘入船仕右船ハ帆無車にて入津仕誠に奇たへの船也そのはせり之早き事飛鳥の如しニ走り候旦入津之砌鐘太鼓笛批把鉦の様成者ヲならし候而着船仕候見先船の人数式三十人宛毎日箱館海岸廻り亀田浜にて漁人仕平磯ニて海鼠鮑あさり杯を取又ハ当別村茂辺地村江罷越し乱防ケ間敷事仕候故女杯とハ屋地中をこき候而箱館に夜にけ仕候

尤えらき御上様より御触出しニハ女子共ハ在に置し様ニ御沙汰有之候処女子共々不置借家成者ハ皆家内引越候ニ付町内皆明家に相成申候故へ当月十一日頃より外ノ方江御役人居置り老人も出入無之左候らへ共十一日以前ニ引越ハ澤山有之依而異国人も右の様子を考へ候故在家に参り候

尤女子共ハ三ヶ二通りハ在家に参り候

廿二日蒸氣船より橋船式艘下ケ右船江人数九人桑辺金寿兵衛宅に上陸仕右異国人から二三番位之者ニ御座候山内座敷ニ而越掛台ヲ十備置右台ハ火もふせんニて長サ式尺斗り〇如此也者ニ御座候且又はへふきハ〇如此右ニ越を掛折申候

御役人様方志やうきへ越折北西ニ相折異国人南西ニ相折依而色々馳走仕此中江カントウ人老参り猶帰り之節市町見測仕度 辨天町大町外高龍寺老ケ寺ニ而帰り且別段船江七人参り候町中寺宮台場迄皆見座仕外山の上茶屋二三軒江はへり候而罷帰り申候

廿三日御家老様蒸氣船対面ニ罷越候処色々之酒肴御馳走有之候お酌ハ色々之装束にて相出<sup>あひだ</sup>且大將ハ志麻守様に無之候らへハ応対不仕趣にて二三番の大將斗り罷出尤大將と申人は日本ニ御座候得ハ中納言位同列ニ御座候と存候

異国人の願いにハ明日ハ町内見測仕趣願出候故(御役人様も承知仕依而)

町内へ明日ハ異国人上陸ニ付店見世を皆開く様に御沙汰有也且樽物之義ハ何成共一切 方ニ付可致者御触出しニ御座候尤今日迄ハ皆置申し候

廿四日御沙汰之通店見世を開き折候処早や四ツ時より上陸仕百人位宛店々より色々之品物納ひ土足ニ而居に上り棚引出しヲ明ケ開き氣合品物ハ何程ニ而も手まねヘヲ以直段問ヘ尤もカントウ人成ハ文字にて書相訳り申候誠ニカントウノ字ハ和字同様ニ而我ら迄も紙書候らへハ相訳り申候但し金毫両は四貫八百文それに順じ毫 小

り式朱迄外には錢旦日本へ渡り同様の丸錢も有通用罷有候不殘買物いたし尤も御上様より諸品相捌候而も不苦趣御触出しニ付相捌申候乍併大概之品物ハ土藏に隠し置候右拂金子ハ前日御家老様に町人より差上尤御役人立会之上諸品相捌江右御役人衆之物店々より御家老様に持参仕右代物之式ハ

御上様より三ヶ一通町家に御下り置ニ相成残りハ御公儀に申上候後御沙汰次第ニ御下し置候加趣ニ被仰渡候

廿五日百七拾人参上陸仕猶買物仕且又高竜寺ニ而蒸氣船衆ばくづを打其札ハ長サ三寸横式寸位右に一より十迄印有其内唐人書印札四五枚有之候

廿六日蒸氣船大將名代三人命江 上陸仕且又黒んぼう七八人上陸外大勢上り體赤犬疋上り此日大勢ニ而諸方江買物仕候処山の上町浦屋ニ而女斗り罷折候処とらをふみはなし家の中にはへり候其時女ハ

とうてんすて前掛斗りしめ逃ケ行処前掛けを異国人ニをさいられ猶前掛けをときはなしわけ行猶又衣装ををさいられこの衣装ものきはたかにて逃ケ走り申候処異国人も其時ハ(とふてんして)去申候此日三人見付られ申候

廿七日昨日ケ様之乱防仕候故異国船に大嶋幸平罷越大嶋申ニハ昨日町家ニ於乱防候間敷儀仕右様ニ候らへハ町内一流迷惑之処カントウ人惡事候ことわり候故今日ハ尅人も買方不仕但し五六人嶋山峠へ罷越山の地を斗り旗を三本建七ツ時迄罷折候

廿八日尅艘出船仕右船ハ石三ノ山へ参ル事にて出船仕猶此日も上陸買方仕候得共尅人も店へ土足ニ而上り不申候但し武士之様成者斗り上り外水夫杯ハ一切店に上り不申候

廿九日異国人病死尅人仕依而東風留りへ回る

卅日ニ葬式四ツ時右之儀ハ尅番ニ先立ハ黒のころも様なる者ヲ着し御経ヲ持其次太鼓打笙ふき其次に官<sup>くわん</sup>六人ニ而棒を差し持参仕候其次に目かね懸たる人尅人同尅人ハ白を首へ巻其次に土懸ケ候者<sup>くわん</sup>十三人持送り人三拾五人斗り尅番終に懸金拵の釧

人右之通りにて仲口より上陸仕東風留りへ参り候処御経よみ此門四五人は泪をこぼし土もかけじニ歸り残り送り人土ヲかけ夫より参り候太鼓ハ<sup>くわん</sup>笛ハ横ふへ也

ゐんろうの郎ハけさころもニ而仕申候其後異国人の願ニハ美女三人斗り鏡へ移したく候間廿才以下の者斗りと申候故無寄所山の上茶屋也も仰付候所茶屋中ニ而くづ引を仕且又其当り茶屋ニ而も女郎はくづ引仕然に全印きよ尅人小炭印みよ尅人猶又尅人外ニ町人娘十三才女尅人都合四人宝行寺にて装束を着写申候尤此寺ハ元よりアメリカノ総師居此ニ御座候故此寺ニても写申候猶又松前御家老様も其の者迄しやうきに越を置候処も写申候右写し様ハ其人ヲ

少しもうくかんよふにをさい鏡ヲ建写し候らへハ其鏡へ白へごふん

の様な者をぬり紙沓枚鏡へ合せ其まゝに火にあぶり候へハ其紙に皆衣装の嶋割色数何成共紙に写りそれより書印申候何れも地面何ヶも如此仕候而船に持参仕右の鏡火にあぶり候節ハ誰にも相見セ不申候依而女四人写し義ハ先者四つ外輪を建其後異国人の子共十三才之人耆人上陸仕わうみこにて拵へ不しき買物装束ハなんと羅沙のしつぼう 着し誠に美童ニ御座候右子共に下来耆人添参余人よりも誠に弁舌相訳り申候 返り候扱又公儀御目附様御着ニ相成依而御乗衆か御用船は南部印を建入津仕それより毎日南部印を右船に建置申候右船ハ大畑船なり

五日朝井キリス船沓艘垂黒利加船沓艘都合式艘出船仕其後尙印に大将へロリ上陸仕御公儀御目附様に應對仕旦又水主之者共白犬男女取合四足持参候

六日山の上茶屋町を写ス 猶又

御公儀御目附頭平山謙次郎様ニ外ニ御耆人罷越尤御用船三艘ニ手馬船式艘都合五艘ニて蒸氣船に对应罷越申候而用事相決り候

七日蒸氣船の申にハ明日ハ出船ニ相成候付御假乞ニ而江戸横浜大別之如く仕之申候故尙印ニ而皆其支度仕候故少しく小雨ふり候故へ扣へに相成申候

依而大将へロリ斗りへ橋船式艘ニ而金江上陸仕候其節の進物ハ小鉄炮沓挺紺羅沙御德利外菰包物<sup>ももづき</sup>三ツ右様之者進物ニ承り尙小鉄炮ハ五段之鉄炮之由ニテ沓ツ相はなす候らへハ玉も碯硝も不入相廻し候らへハ又打たせるよしに承り何連前後五度も相廻し候誠ニ寄たいの鉄炮ニ御座候猶又異国人滞船之内之物ハ鶏新ねき玉子せりのような物此方より遣し外馳走様く仕依而五ツ半頃ニ罷帰り申候猶水主之者今日も子犬十四足持参仕宝行寺より写ス鏡道具并ニ仲口より 岸引見様道具を諸方江建候旗諸事之物を皆船江持参仕其後店々江をはよふくと暇乞仕候而船ニ帰り申候

八日朝式艘共々車ニ而出船仕候其節私共江戸浦賀船得宝丸江罷越に而見洲仕異国人ニ出船之叩おはよふくと一流こへをかけ且又此方ニ而もはよふくとこへかけ候処大勢屋くれの上へ上り出船仕候然ルニ箱館嶋山崎江参り候処からみかゝり右船帰申候其節ハ大鼓打鐘ならしかへをふき大筒式艘ニ而四度はなし東風留り江間懸り仕依而もや上り候らへハ早速出船仕候且又出船之叩先船ハ六尺四方位の旗四ツ上右はたハ様々の染旗に御座候柱の房に下ケ且又からし子五ワ右船出船前に三百石船の柱位の木を弁天崎江瀬着仕候右木に白旗を木のうらに建根元ハ金くさりニ而留置川岸より上ハ白へしやうに紙引旗へ様々の字を書き印置申候未た有之申候

旦又九月十日ハ諸事取りきわめ十一日ニエトロフ カラフト江御公儀御目附様御出立被成候

町方頭取大嶋幸平稲川仁兵衛蛭子次郎箱館役人三人御城下より閑様藤原様候へ都合五人御城下より御家老様松前解ケ油様御用人遠藤又左エ門様石塚官藏様外に沓番備七拾五人亀田より当別迄御改メ罷有候

尤式番備も御探成ルニ御座候此外箱館からハニ男三男迄不残出勤仕し且又足輕ワ夜中には異国人上陸之処見座に置夜は人足も左し置也異国船滞船中ハ朝夕大筒はなし朝ハ明六ツ夜ハ五ツ時右大筒之音ハ家ハ皆ゆるき申候旦又朝夕大鼓笙批把鉦の様成者ニて半時斗り宛御盛の様子に賑々敷御座候日本ニ御座候へハ朝夕神仏を拝し候様相見へ申候猶又出船走り候之時ハ掛をこふに筆かへを以て掛こく申し候異国船五艘之内沓艘ハ小走り式艘ハ運船式艘ハ蒸氣船ニ相見へ申候蒸氣船大きサ深サ六間位長サ四拾間余幅八間車厚サ式間車差渡し五間大筒廿五挺宛玉目三の目位但し大々筒ハ玉目八貫目位ニ相見へ申候鉄砲ハ式百挺銀鎗ハ不数知帆ハ十八張外ニ有之柱三本筋縄クモの巢の如し運船式艘ハ長サ三拾三間余幅七間余深サ五間位大筒廿五挺



小筒百挺余銀鎗ハ不数知帆柱同行乗合人五艘ニ而千三百人斗り蒸気船ハ壹艘ニ付三百人余宛運船に貳百五拾人余残り

先陣船貳百人余右五艘之内<sup>出陣乗之者也</sup>日本人拾五人乗合仕右人ハ流れ船人数也外ニ女四五人罷折候

先陳船ニ大筒廿五艇小筒七拾五艇余銀鎗不数知長サ三拾間余幅七間深サ五間也橋船ハ壹艘拾五艘位より廿二艘迄有之右船ハ五色ニ御座候帆式張宛置候長サ五百石船也手馬位ニ見ヘ申候且又權ハ丸かへ也船名ハ蒸気船壹艘ハホウテン同壹艘ハメセセフ井キリス船名マセトニヤ。雨リカ壹艘ハレキセントン壹艘ハラインズ右之通ニ御座候大將名ハベロリ右ハアメリカ井キリス大將名ハステマ

異国人病死之人数東風留りに葬り処貳尺五寸斗りの右碑を建置右江尺越廻し其尺にも<sup>白</sup>志やんを引碑ハ二十台ニ而南面ニ建置申候右場所ハ日本人燈場ニ而地藏寺あり

(運船繪)と説明(以下省略)

(蒸気船の繪)と説明

亞黑利加大將名ハベロリ

井キリス 同名ハステマ

亞黑利加船名ハ

軍船ハ・マセトニヤ

蒸気船ハ・ホウテン

また・メセセフ

井キリス・レキセントン

アメリカ

先陳 ラインズ

唐人名ハ右ハ

四五人上陸

満十八才ノ

アメリカヨネム

セイ

マンネ

右名ハ位ニ依而字ナアリ

銀ん

(銀貨の繪)

と説明

(銃の繪)

と説明

(鉄砲の繪)

と説明

(日傘の繪)

と説明

(懷中時計の繪)

と説明

(もの指の繪)

と説明

(きせるの繪)

と説明

(股引の繪)

と説明

(上着の繪)

と説明

(足衣の繪)

と説明

(くつの繪)

と説明

(帽子の繪)

と説明

(アメリカ人の繪)

と説明

(黒んぼうの繪)

と説明

(カントウ人の繪)

と説明

六セキ

二十〇〇テンテン

五ハエ

十〇テン

四フイ

九ナイン

三フルイ

八アイテ

二テウ

七七シヤウン

一ホアン

右ハ一より十迄之事也

(以下 省略)

何国性広東

得門人也

不某末夕学ヲ

学

名ハ満年十八才ト書

右ハ私義カントウ人エ

扇を出し是江

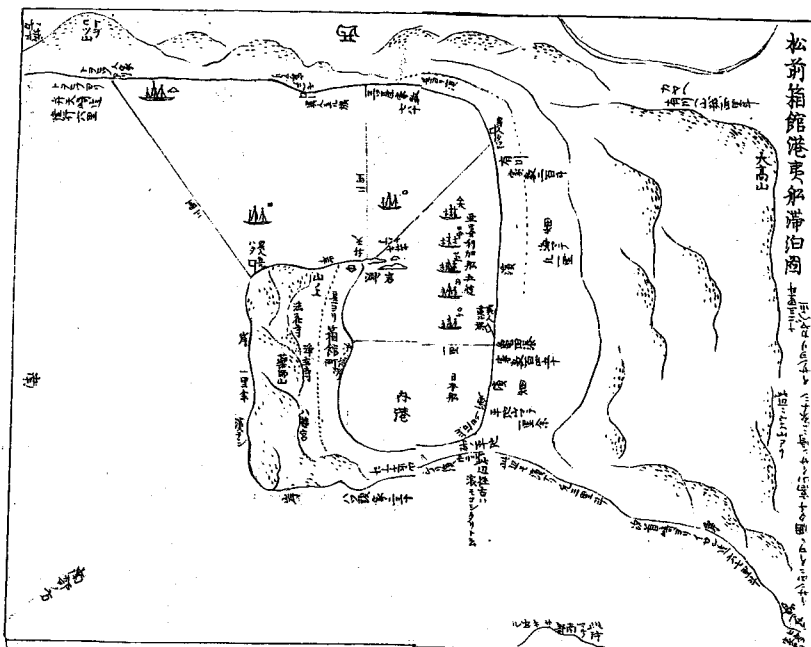
文字ヲ書候と

手まねへ仕候らへハ

如此ワカ手ニ書

候而中々書不申候

竹の事ラエト 柄ヲウリウ 燭台ヲ ステキ  
 燭燭ヲケンロ 土びんヲテツハ 栗ヲ セスナ  
 ロヲケン 耳ライフレ 鼻ヲナラス  
 茶ヲテ 砂糖ヲスーカリ 馬ヲホウス  
 煙草ヲバイハ キセルヲバイクワ  
 茶釜ヲテエン 筆ヲベンナウ 眼ヲアイ  
 女ヲトイ 齒ヲケエイ 目のげをアイベウス  
 ロよりふく事ヲケレ 早やへと云ヲハイライロ  
 物の値段聞事ヲハマツ 寺ヲミヤ  
 法師ヲソ 魚シヤマコ 赤鯛カハ  
 鳥リアラシ 船ヲステンム 帆マカスタ  
 鏡ヤエシ 火ハヤ 海ラン 岸コエル  
 羅沙ホウシ 水ヲワン 印エキ 吉ナアアン  
 米ライヒ 縄ロウフ  
 金壺両 ハンタウ 四千八百ト云  
 金式分 ハフタウ 二千四百ト云  
 金壹分 コアレタウ 壹千二百ト云  
 箱館の地図※  
 嘉永六癸丑年秋カラフト  
 ヲロシヤ人 交易場の絵(省略)  
 嘉永六癸丑年秋  
 カラフツメンエ  
 半窓図畫梅花月  
 満枕波濤松樹風  
 和風  
 甲寅夏書  
 広東羅森口印



本史料閲覧に際して城澤朝吉の御子孫城澤昇氏、本田敏雄氏の御好意を受けたことを深く感謝致します。  
 ※印箱館の地図は次の『北辺新聞』にある図を簡略化したスケッチ風なものである。  
 (一九九三年四月一日受理)

- (1) 『岩手史学研究60』 岩手史学会 昭和五〇  
 同右 一二五頁  
 (2) 同右 一二六頁  
 (3) 『岩手史学研究73』 岩手史学会 平成二  
 前掲60号 一二三〇頁  
 (4) 同右 一二三二頁  
 (5) 『岩手史学研究73』 岩手史学会 平成二  
 市立函館図書館蔵 『郷土資料複製叢書30』 昭和五七  
 『青森県立図書館郷土双書三』 昭和四五  
 (6) 東北大学附属図書館蔵写本  
 (7) 『新異国業書8』 洞富雄訳 雄松堂出版 昭和六一  
 同右三〇七頁〜三三六頁  
 (8) 幕府の松前藩に対する「御建書」及び市在住民への「解書」は『函館市  
 史通説編第一巻』五五二頁以下に載せられている  
 (9) 『大日本古文書幕末外国関係文書附録之一』 六四四頁  
 前掲訳三一八頁以下  
 (10) 同右 三三二頁以下  
 (11) 同右 三三二頁  
 (12) 同右 三三四頁  
 (13) 『北上市史』北上市史刊行会 昭和五九  
 同右 三八四頁